

# 実践事例① 墨田区立小梅小学校

## 1 取組・活動名

「障害者理解の促進」

## 2 取組・活動のねらい

- オリンピック・パラリンピック教育に関するアンケート調査(対象4～6年生、質問18項目)から、児童の約4割が高齢者・障害者との交流経験が乏しいことや、約8割が障害者スポーツ(パラスポーツ)を身近に感じていないという実態が判明した。
- 一方、「障害のある方と交流したい。」「パラスポーツを見たい。」という児童が約7割を占めた。
- これらのことから、パラアスリートや関係者をはじめ、障害者理解の促進・啓発に関わっている方々を講師として招き、特別授業を開催することにより児童の関心を高めることを目指した。

## 3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間ほか・10時間程度」

## 4 実施上の工夫

- ・ 児童の関心を高めるため、アイススレッジホッケー、ブラインドサッカー(視覚障害者5人制サッカー)、CPサッカー(脳性まひ者7人制サッカー)、陸上競技(走り幅跳び、100m)と、異なるパラスポーツを取り上げた。
- ・ 特別授業の開催について、告知ポスターや学校ホームページなどで保護者・地域にも広く周知し、参観者を募った。
- ・ 講師の活躍を記録した映像を観たり、著書を読んだりする事前学習を取り入れた。

## 5 本取組・活動の内容

### パラリンピアンによる特別授業『夢が一番のエネルギー』



- ・ 子供の頃の様子や競技を始めた理由、海外修行の苦労話などを分かりやすく話して下さった。車いすを自在に操る姿に歓声が上がった。全ての児童がパラリンピックの銀メダルを手にすることができ、大きさや重さを肌で感じ、感激していた。
- ・ 「今、マイナスだと思っていることがいつか必ずプラスになります。マイナスは、決してマイナスではありません。」というメッセージが印象的であった。

## パラアスリートによる特別授業『かとけん先生のブラサカ教室』



- ・ デモンストレーションとして披露した「8の字ドリブル」。正確なボールコントロールと、もの凄いスピードで3mほど離れた教員の間をドリブルする姿に、児童は圧倒された。
- ・ アイマスクを装着し、かすかに鳴る専用ボールの音だけを頼りにボールを蹴ったが、狙った方向へ転がす難しさを実感した。
- ・ 「(何事も)始めなければ、始まらない。」というチャレンジ精神を学ぶ絶好の機会となった。

## パラリンピアン、義肢装具士による特別授業

### 『転んでも、大丈夫 ～義足ってカッコいい!～』



- ・ 児童は体験用義足を装着し、実際に義足で歩く体験をした。義足で歩く難しさを実感することにより、全力で走ったり、跳んだりするパラアスリートの技術力の高さと勇氣に感心していた。
- ・ また、事前に講師の活躍を記録した映像を観たり、著書を読んだりしていたので、興味をもって臨むことができた。
- ・ 直前に行われたリオデジャネイロパラリンピックの話を知ることができ、3年後の東京大会を身近に感じることができた。

## 6 成果

- ・ オリンピック・パラリンピック教育に関するアンケート調査(東京都教育委員会)から、児童の実態を客観的に把握することができた。
- ・ オリンピック・パラリンピック教育重点校として、計7人の講師を招くことができた。特別授業を数多く開催することにより、障害者理解の促進、重要性について児童だけでなく保護者・地域、教職員も意識することができた。
- ・ 東京都や東京都教育委員が制作した『オリンピック・パラリンピック教育映像教材』『広げよう障害者スポーツ～誰もが生涯を通じてスポーツを楽しむために～』『障害者スポーツ普及啓発映像 Be The HERO』などの映像資料や、『オリンピック・パラリンピック学習読本(小学校編)』を活用して事前・事後学習に取り組んだことにより、障害者理解の促進をより効果的に図ることができた。
- ・ 墨田区教育委員会主催のオリンピック・パラリンピック教育担当者連絡会において、取組実践を発表する機会に恵まれ、効果的に他校に周知することができた。
- ・ 多様性を認め合い、互いの違いを尊重することができる児童の育成を意図的・計画的に進めることができた。